

《自主研究》

絵本をもちいた国際理解教育についての研究
—「読みあい」を通じた学びづくりに向けて—

小野寺美奈 *1

A Study on International Understanding Education with Picture Books

Mina ONODERA

1. 緒 言

これまで筆者は、日本国際理解教育学会の特定課題研究「難民問題を通じて国際理解教育を問う」プロジェクト(2016~2018年度)^{注1}の中で、難民をテーマとした絵本の収集・整理・分析を行ってきた^{注2}。また、2019年度~2021年度には、収集した絵本をもちいて読みあい実践も行ってきた^{注3}。読みあい実践の中では、「大人が子どもに読みきかせ、学ばせる」といった形ではなく、「大人も子どもも一緒に読みあい、ともに語り合う」というという形の実践を重視し、絵本を媒介とする年齢をこえた学びの場づくりに取り組んできた。

本研究は、その一連の流れに位置づくものである。難民というテーマをはじめ、様々な地球的課題を扱う国際理解教育において絵本というアプローチがもつ可能性について、特に絵本の「読みあい」という方法がもつ意義の考察を通して検討することを目的とする。

2. 研究方法

本研究に取り組むにあたっては、文献研究を行った。

3. 国際理解教育とその方法

国際理解教育とは、①人権の尊重を基盤として、現代世界の基本的な特質である文化的多様性および相互依存性への認識を深めるとともに、異なる文化に対する寛容な態度と、地域・国家・地球社会の一員としての自覚をもって、地球的課題の解決に向けてさまざまなレベルで社会に参加し、他者と協力しようとする意思を有する人間、さらには、②情報化社会の中での的確な判断をし、異なる文化をもつ他者ともコミュニケーションを行う技能を有する人間を育成する教育である(日本国際理解教育学会編著:2010:28)。

その学習内容は「A 多文化社会(文化理解、文化交流、多文化共生)」「B グローバル社会(相互依存、情報化)」「C 地球的課題(人権、環境、平和、開発)」「D 未来への

選択(歴史認識、市民意識、参加・協力)」など多岐にわたる。

国際理解教育の方法については、地球的課題など複雑な事象が絡んだ問題を取りあげることもあり、従来、伝達の・知識理解的なものになりがちであった。市川(2009)は、国際理解の「理解」の不可能性を指摘した。この指摘について藤原は、「多文化社会やグローバル社会における利害の対立や紛争を解決するためには、知識理解中心の国際理解教育では不十分であるという示唆である」と解釈し、「知識の伝達や教授による教え込みによる『理解』は不可能であり、学習者による参加や対話による活動的な学び、非言語や感性も排除しない構築的な学びとその共有から『理解』の可能性を探っていくべきだ」という主張である(藤原2015:12)。

このように、国際理解教育では近年、言葉による知識的な対象理解のみならず、感性や心と身体つながりなどへも着目していく必要性やそうした方法論の模索の必要性が提起されている。

4. 絵本というアプローチ

1) 絵本とは

絵本は、文字情報と豊かな視覚情報が協働したメディアである。

藤本は、「絵本は『ことば』と『絵』という二種類の異なる要素の組み合わせによって情報が伝達されます。『ことば』はもちろん内容(たとえば、ストーリーなど)を伝える(語る)要素ですが、絵本では、『絵』も要素なので」と説明する(藤本2015:45)。

絵本の文字情報は、限られている。多くの絵本には主人公がおり、物語は主人公の目線で、主人公の置かれた境遇や感情がメインテーマとして描かれている。また、絵本に

注1 研究概要は日本国際理解教育学会研究・実践委員会編(2020)を参照のこと。

注2 研究成果については、小野寺ほか(2020)を参照のこと。

注3 実践の内容について、詳しくは拙稿小野寺美奈ほか(2021)で紹介している。

*1 東京家政大学子ども学部子ども支援学科

おいては時間や空間の移動が一定ではなく非常に自由であり、次のページをめくったら10年後の過去あるいは未来であったということもよく起こる。このように、絵本で伝えられる内容は、決して網羅的なものではなく、「情報の穴」がある。「情報の穴」は、知識理解の面ではデメリットのように思われるが、こうした余白的特徴は、国際理解教育実践において、学習者が想像力を介在させる仕組みとして機能し、学習者が主体的に情報を読み取り感じ取りあるいは発見したり、絵本の物語に自らの経験を重ねあわせながら学ぶことを可能とする（小野寺2021：73）。

2) 読みあいとは

「読みあい」とは、児童文学者である村中李衣が多様な現場等での実践や研究の中から生み出した概念であり、実践の方法である。

一般に言われる絵本の「読み聞かせ」が、場合によっては一方的な語りかけを連想させるのに対して、「読みあい」について村中は「大切にしたい心の向きが違うのです。『読みあい』は、声を出して物語を伝える側からその声を聴く側へ一方的に提供されるサービスではなく、両者が自分たちの心の中に物語をくぐらせることで、双方向に心の通い合いを行うことを目指します」と説明する（村中ほか2019：7）。

読みあいとは、読み手と聞き手が情報の発信者と受信者という固定した関係性に終始するのではなく、絵本をなかだちに、より対等で相互的な関係性の中で絵本をともに味わい、ともに絵本の物語を探検するという実践のありようなのである。

「読みあい」には、決まったかたちや方法があるわけではないが、国際理解教育実践を想定した場合、以下のような「読みあい」の実践方法が考えられる。

まず、グループの1名が同じグループの他の参加者らに対して、声を出して絵本を読む。ここでの所謂「読み聞かせ」のプロセスで重要であるのは、絵本を読み聞かせる人の「声」とともに、1冊の絵本を共有し時間を共有することでもある。絵本を「読み聞かせ」した後、その絵本と一緒に眺めたりページをめくったりしながら、互いに感想を述べあい、また気づきを発見しあうという流れである。

3) 国際理解教育の実践としての「読みあい」とその意義

村中は「きっかけは（絵本ではなく）あなたにある」と述べ、「読みあい」について「他者とのかわりに身をあずけながら、自らの魂で、ものがたり空間、ものがたり時間の中へ分け入っていく」行為であると語る。絵本の「読

みあい」を通した国際理解教育とは、学習者がこれまでの人生で培った経験・知識さらには感情を、フルに働かせながら物語世界に没入するアプローチであると言える。

学習者は、絵本に様々仕掛けられている「情報の穴」をきっかけに、主体的に、既に自らの内にある「知」（経験・知識・感情）をもちいて考えながら学びを深めていく。また、絵本の絵から、言語では語りえないメッセージを感性豊かに感じ取る。絵本というアプローチは、国際理解教育にとって、知識理解に偏重するのではなく、学習者の感性や心、そして既に自らの内にある「知」に着目したもう一つの方法論として大きな意義を有しているのである。

5. 結 語

日本において、文字内容が易しい絵本は、子どものものであるように思われがちであるが、年齢や国籍を問わずすべての人が世界やそれにつながる自らの地域が抱える課題への理解を深め、自らの向き合い方を考えるきっかけとして、絵本や「読みあい」の方法は有効である。

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大状況もあり、実際にワークショップを行うことが難しかったが、今後、本研究を基礎としワークショップを重ね、実践・研究ともに進めていきたい。

文 献

- 1) 市川秀之：「国際理解教育における理解不可能性の位置づけ—教育行為と教育者の立場の流動性の顕在化—」日本国際理解教育学会『国際理解教育』Vol. 15, 創友社（2009）。
- 2) 小野寺美奈, 當銘美菜, 前田君江, 山西優二：「難民絵本の特徴と教材としての可能性」『絵本学：絵本学会研究紀要 No. 22』絵本学会, pp. 13–24（2020）。
- 3) 小野寺美奈：「絵本を用いた難民問題学習における想像力」『東京家政大学研究紀要』第62集（1）, pp. 69–78（2022）。
- 4) 小野寺美奈, 當銘美菜, 前田君江, 山西優二：「難民絵本を読みあう・語りあう—対面からオンラインまで」『絵本BOOKEND2021』絵本学会, pp. 41–48（2021）。
- 5) 日本国際理解教育学会編著：『グローバル時代の国際理解教育—実践と理論をつなぐ』明石書店（2010）。
- 6) 藤原孝章：「国際理解教育の景観—実践と理論をつなぐ」日本国際理解教育学会編著『国際理解教育ハンドブック—グローバルシティズンシップを育む—』明石書店（2015）。
- 7) 日本国際理解教育学会 研究・実践委員会編：『特定課題研究 国際理解教育の理念と方法を問い直す 報告書』日本国際理解教育学会（2020）。
- 8) 藤本朝巳：『子どもと絵本—絵本の仕組みと楽しみ方—』人文書院（2015）。
- 9) 村中李衣, 伊木洋：『はじめよう！ブックコミュニケーション 響きあう教室へ』金子書房（2019）。